

# 「コウホートフロー」の概念について

森 岡 清 美

## 1. ライフサイクルからライフコースへ

われわれ家族研究者が初めてコウホートの概念に接したのは1965年のことであった。この年9月、東京で第9回国際家族研究セミナーが開催されたさい、「方法論的諸問題」のセッションで、R. ヒルが家族変動を把握する方法の一つとしてコウホート法を挙げたこと（日本ユネスコ国内委員会 1966：139）、また、同年12月の *American Sociological Review* (30：6) で、N. ライダーが *The cohort as a concept in the study of social change* なる画期的な論文を発表したこと、がそれである（Ryder 1965）<sup>1)</sup>。それまで、われわれはコウホートについて殆ど何も知らず、代表的な英和辞典にもまだこの語が統計用語としては登載されていなかった。

コウホートの概念との比較的早い出会いにもかかわらず、われわれの認識はきわめて浅いまま多くの歳月をへたが、漸く1980年に至り、アメリカのライフコース研究の成果を組織的に学習する機会をえたとき、コウホートがライフコース研究の要の位置を占める概念であることを知った（森岡 1985）。それ以来9年を経過した今日、コウホートの概念はわが国社会学研究者共有の知的財産の一部となった感が深い。

人の一生は、役割の移行をともなう一連のイベント、出来事で点綴されている。学校教育修了、初就職、結婚、子どもの出生・就学・学卒・結婚、夫の退職・死亡などがそれである。従来のライフサイクルの研究は、これらの出来事が誰にも起きることを前提するとともに、出来事の

タイミング、すなわち出来事が起きる年齢、および出来事が起きる順序に規則性がみられることを前提して、発達段階を刻み、平均値や中央値によって各段階の長さを測定したのである。これは、ある社会を構成する人々の一生を大づかみにとらえるために便利であったばかりでなく、年齢相応の地位役割についての社会規範が人の一生の道行きを強く規定していた時代には、職業階層によるヴァリエーションさえ考慮に入れる限り、実態をとらえるための有効な方法であった。

ファミリー・ライフサイクルとして研究されてきた結婚以降の出来事が、かりに普遍的に生起するとして、また子どもの学卒までのサイクル前期、J.メイヤーに従っていえば、ライフコースが制度化されている時期 (Meyer 1986)、における発達の規則性は承認されるとしても、子どもの結婚以降のサイクル後期の発達にはヴァリエーションが大きい。とりわけ高齢者におけるヴァリエーションの大きさは、ライフステージの設定というライフサイクル研究の基本的技法を無意味にするほどのものであることは、ライフサイクル・アプローチの限界としてわが国でも指摘されてきた (森岡 1972: 48)。それに加えて、アメリカやフランスなどでの離婚率の高さ、さらに北欧諸国での同棲率・婚外出生率の高さが、一生の出来事の規則的なタイミングと順序だった生起についての固定観念を破碎し、ライフサイクル研究を支える基本的な想定に根本的な疑問を提起したのである (森岡 1977: 13, 森岡 1989 a)。

1980年にわれわれが出会ったライフコースのアプローチは、時間の推移のなかで対象をとらえようとする点でライフサイクル・アプローチと同様であるが、離婚率の上昇、および若者と高年者を中心に顕著になった生活の個別化等による家族観の変化を背景として、集団としての家族から、家族など社会的文脈における個人に、観察の焦点を移した。それは発達段階論では処理しきれない個人の可塑性、また個人間の集会的多岐性の認識に立脚するものである (Riley, et al. 1988: 248-250)。

人ごとに異なる多岐な人生行路は、ライフヒストリーを記録することによってとらえることができる。しかし、ライフヒストリーそのままでは個別記述的であって、研究資料を作成したにとどまる。そこで、何らか法則定立的な努力をそのうえに加えるとすれば、さしあたり典型的処理が考えられよう。ただし、年齢幅の大きい対象全体について直ちに類型化を試みるのではなく、まず年齢群に振り分けて、同一年齢の対象ご

とに類型化を企てたうえで、全体について類型を構成しなおすことが求められる。つまり、コウホート法の併用である。コウホート法は、多岐多様な人生行路から、質的（類型的）量的（統計的）に、何らかの規則性を発見するのを助ける技法であって、個人間の多岐性を前提するライフコース・アプローチに、斉一性を発見することを可能にさせる技法である。

## 2. コウホートの概念およびコウホート法

コウホート (cohort) とは、ほぼ同じ時期に生まれた人々の集団（出生コウホート）である<sup>2)</sup>。ほぼ同じ時期に特定のシステムに加わった人々の集団を指すこともある（旧陸海軍の学校についていわれた何期、また入社何年組、入省何年組、結婚コウホート、古い用語では法膺一得度以降の経過年数、膺次一おとなになるための基準とされる座入り以来の経過年数〔肥後 1941 : 232〕でグルーピングされる人々）。K. マンハイムが世代 Generation の語で捉えたものと、文脈は同一ではないが、対象はほぼ同じとってよい<sup>3)</sup>。ただし、今日では世代の語を親族関係を指すために保留する論者が多い（Ryder 1965 : 853 ; Riley, et al. 1988 : 248）。

上に述べた限りではコウホートは統計上のカテゴリーであって、集団の語を用いししたが、社会集団としての実態をもたない<sup>4)</sup>。しかるに、なぜコウホート別把握（コウホート法）が多岐な対象のなかから規則性を発見する助けになるのであろうか。それはまず第一に、同じ年代に生まれた人々が、同じ年齢で同じ歴史的出来事や歴史的変化を経験し<sup>5)</sup>、性別・職業階層別などの社会的位置の差異にかかわらず、多かれ少なかれ同じようなインパクトを受けると考えられるからである。そのための条件として、出来事が戦争とか不況とか国民生活に深刻な影響を与える大事件であるか、マクロ環境の変化が法律で定められた年齢規範によってミクロ環境の変化に轉換しなければならない。法的な年齢規範としては、戦時には徴兵適齢に規定された兵役が重要であるが、平時・戦時を問わず年齢階梯的な義務教育制度がとりわけ重要であって、ライダーは学校こそコウホートの創造主であると強調している（Ryder 1965 : 854）。このようにみると、コウホート法が意味するコウホートは、義務教育制度をもつ近代国家において歴史的に出現したことがわかる。

コウホート法が多岐な対象のなかから規則性を発見する助けになると考えられる第二の理由は、同一コウホートの人々が受けた多かれ少なかれ同じようなインパクト、とくに若いときに受けた同じようなインパクトのいわば残像が、後遺症のようにその後も保持されると想定されることである (Ryder 1965 : 851)。マンハイムは、思春期の終わり頃から成人期の始め頃にかけての経験から、その世代を特色づけるような政治的イデオロギーが形成されると主張したが、コウホート法はマンハイムの見方をより一般化した形で前提するものといってよいだろう。

社会変動が起きてあいつづくコウホートの経験にさま変わりが生じたとき、コウホートは単に個人の位置を示す概念から、社会的な実態となる (Ryder 1965 : 855)。このゆえに、コウホート法は同一年齢の諸個人の加齢過程を、彼らを成員とする社会の歴史過程との相互作用においてとらえることを可能にするのである。単一のコウホートの研究は、加齢にともない家族関係・職業行動・政治的信念などの点で、人々がいかに変化するか、またどのように時代の影響を受けるかを明らかにし、複数のコウホートの研究は、こうした加齢過程の歴史的变化を明らかにするのみならず、変化の時期を特定する助けとなることだろう。ヒルが、親・子・孫の3世代を比較することによって家族の変化をあらわにする技法を開発したのは、社会変動の影響は家族が保持する文化をフィルターとして家族に及ぶとみだからである (Hill 1970)。これにたいしコウホート比較による変化の考察は、近代社会では個人にたいする家族の掌握力が減退して、個人が直接に社会変動にさらされることを前提する (Ryder 1965 : 853)。コウホート法が家族の個人化を理論的に前提していることを自覚せずにライフコース研究に従事していると、いつの間にか家族研究の埒外に出てしまう危険のあることに注意を喚起しておきたい。

### 3. コウホートフローの概念

コウホート法のキイタームは年齢および加齢であって、加齢過程を解明するためのコウホート法は、何らかの縦断的観察を用いる。他面、ある時点で、いわば横断的に、コウホートをとらえるとき、年齢階層 *age strata* が現れる。すなわち、社会や集団のなかの諸個人は、年齢と年齢

相応の地位役割によりおおざっぱに区分されて、若い層から年配の層へとシリーズをなす。こうして、どの社会にも年齢構造 age structure が成立する。分業が単純で社会変動が緩やかな社会では、ここでいう意味のコウホートが顕在しにくい反面、かつてのわが国農山漁村の集落社会でその例が報告されたように、包括的な単一の年齢構造が公式化される。これにたいして、現代の複合社会は非公式なものを含めて多元的な年齢構造を特色とし (Neugarten, et al. 1968 : 5), そのかわりコウホートが顕在化する。

このように考えたうえで、もう一度コウホートを時間の経過のなかにもどしてみると、若いコウホートがしだいに年配の層へとせり上がってゆくのが観察される。先行するコウホートに後続するコウホートがとって代わる過程、さきにふれたライダーが比喩的に人口学的新陳代謝 demographic metabolism といい、あらためてコウホートの連続 cohort succession と呼んだ現象である (Ryder 1965 : 843, 850)。これは今日、コウホートの流れ cohort flow と呼ばれることが多い (Riley 1987 ; Riley, et al. 1988)。

コウホートフローの概念が注目されるのは、マイクロレベルでの加齢過程の変化と、マクロレベルでの社会の年齢構造の変化との、相互依存・相互規定の関係が、コウホートフローを媒介とすることによって説明されるからである。それにはつぎの2面がある。

- (1) 各コウホートは一定の人口規模と組成をもってライフコースを開始する。途中で死亡とくに戦争によるダメージと移民のため多少の修正があるにせよ、最初の人口規模と組成が、コウホートフローによって、特定時点における特定年齢階層の人口の規模と組成に決定的な影響を及ぼす。もし、ある年齢階層に配当された地位役割にたいして、新来のコウホートが大きすぎるか小さすぎるとき、すなわちコウホートフローが攪乱的であるとき、年齢に関連した役割の修正が促進される (J. ウォーリングの攪乱的コウホートフローの概念 [Riley, et al. 1988])。コウホートフローが観察される最小の集団は家族である。(ただしここではコウホートと世代が一致する。) 1世代1夫婦の原則をもつ直系制家族は、攪乱的コウホートフローが起きるのを制度的に排除し、かつ隠居慣行によって円滑なフローを保証するものであった。
- (2) 社会変動により、あるコウホートの成員の加齢過程が先行のコウ

ホートの成員のそれとは異なってくる。異なる加齢過程の経験が、コウホートフローによって特定年齢階層の態度や行動に影響する。戦中の軍国主義教育を受けた老年層（コウホート）と戦後の民主主義的教育を受けた中年層（コウホート）、戦中戦後の極度の物資不足を経験した中高年層（コウホート）と高度経済成長の恩恵のなかで育った壮青年層（コウホート）を比較するまでもないことである。

社会変動によって加齢過程が変化するとき、ここにつぎのようなコウホート規範形成 cohort norm formation と呼ばれるプロセスが働く。

- ①社会変動に対応して、あるコウホートの成員が、年齢を特徴づける行動の新しいパターン new age-typical patterns and regularities of behavior を展開し始める。
- ②これらの行動パターンが年齢にふさわしい規範 age-appropriate norms and rules と規定されるようになり、権威者によって補強されて他の年齢階層に影響する。こうして、社会の役割構造のなかに制度化される。
- ③年齢規範と社会の役割構造のこうした変化が、年齢に関連した行動をさらに方向づける (Riley 1987)。

ただし、新しい行動パターンを展開し始めるコウホートは、社会変動の動きに直接に関与するだけの加齢を遂げているとともに、仕事や生殖家族や一定の生活様式にコミットするほど年をくっていない、若い成人のコウホートに集中する (Ryder 1965: 848)。

#### 4. コウホートフローと組織の自己決定能力

現代社会について、人口学的な文脈でコウホートフローを云々することは可能だし、とくに今日の高齢化は攪乱的コウホートフローの概念でとらえる必要がある。しかし、現代社会の年齢構造は多元的であるので、コウホート規範形成を含めた議論は、むしろ組織についてこれを試みたほうが生産的である見込みが高いと考えられる。

組織の構成員をかりに組織の課題達成に能動的にかかわってゆく人々と、受動的に活動を受けとめてゆく人々に分ける。つぎに、組織の活動を担う能動的構成員を年齢階層別に大きく区分すれば、若手・中堅・長老の3層になり、それぞれフォロワー・リーダー・アドバイザーの役割

を主とするということができよう。

この年齢構造をコウホートフローの概念でとらえなおしてみると、いま長老である人々は、中堅から長老への加齢の間に実質的なリーダーシップを若いコウホート成員に委譲したか、奪われたかである。また、現在の中堅がいつまでリーダーの座にとどまるか、若手を将来のリーダーとして育成しているかどうか、が問題となる。

私が関係する分野の研究組織にかんする、ここ3～40年ほどの観察を交えていえば、ある1、2の研究者がリーダーであるようにみえても、その実、彼もしくは彼らの属するコウホートがリーダーシップを支えている。リーダーと目されるのは年齢によってというよりは研究業績によるのであるから、リーダーは中年以上の年齢層に幅広く分散してよいはずであるが、影響力のあるリーダーたちは同一コウホートに集中する傾向がみられるのである。特定分野で影響力をもつには、同じ分野の他の有力な研究者と協力することが必要であるが、よく似た年齢の人々とは協力しやすいため、ある特定のコウホートがリーダーシップを担うこととなるのであろう。年齢の離れたリーダーが協力しているようにみえる場合でも、真性のリーダーシップは年長のリーダーのコウホートにあり、やがて若いリーダーのコウホートがこれを継承する。コウホートフローにとまってリーダーシップの世代交替が出現するのである。もちろん、老いゆくコウホートがいつまでもリーダーシップを掌中に握りしめて世代交替に応じないこともあり、また世代交替をしようにも若いコウホートがリーダーとして育っていないこともある。ともあれ、コウホートフローによって若いコウホートがリーダーの座に就いたとき、一定の時代環境に規定された彼らのユニークな経験が、既存の研究組織にたいして彼らを改革者たらしめることがあることに注目したい。

私は先に『新宗教運動の展開過程』（創文社）という書物をまとめ、教団ライフサイクル論と私が名づけた視点から特定の新宗教教団の展開過程を分析した。そして、先人が論じたような宗教運動のライフサイクルはごくおおまかな素描にすぎず、組織化・制度化の末に必然的に解体に向かうとは限らない。もし、トインビーがいう「自己決定能力」、私という革新的でありうる能力を指導層がもちつづけない場合、ライフサイクル論が説く方向に流れるほかないが、「自己決定能力」を保持しえた場合には、解体もしくは空洞化に向かって進むとは考えがたいので

ある。これが私の結論であったが、何が自己決定能力を保持させるのか、その要因にはまだ考え及ばなかった。

最近、コウホートフローの概念に出会い、コウホートフローの必然的な流れのなかで、革新的でありうるリーダーコウホートを創出することが、この点への一つの解答であることに気づいた。コウホートの年齢幅にもよるが、リーダーコウホートはいくつかのコウホートを跳び超えて現れるので、意識的な育成が必要とされる。そのさい、候補コウホートの加齢過程でのユニークな経験が生かされることが、革新的でありうることの必要条件であろう。

#### 注

- 1) この論文は最初アメリカ社会学会の1959年大会で発表された。ライリーはマンハイム論文(1928)に匹敵するもの、とこれを高く評価している(Riley 1987)。
- 2) 人類学者はこれを age grade, age group と呼ぶ。ライダーはつぎのように定義している。“birth cohort, those persons born in the same time interval and aging together” (Ryder 1965 : 844)。
- 3) ライダーも、generation の語で cohort を意味した先例の代表にマンハイムを挙げている(Ryder 1965 : 844)。
- 4) ライダーはいう、コウホートが(人類学者の考えるように)社会集団の実態をもたぬにせよ、連帯性のセンスがあるように思われるのは、コウホートのサブセットともいうべき仲間集団の、態度形成にかかわる作用に注目するからである。同年代の人々(coevals)ないし竹馬の友(cronies)による「自己社会化」こそ、社会変動期における仲間集団(コウホート)の経験をユニークなものにするのであって、リースマンが指摘した内部志向型(その標準は親たち)に代わる他人志向性(その標準は同時代人)の台頭は、まさにこの動きに照応するものである、と(Ryder 1965 : 854-855)。
- 5) ライダーはコウホートを定義して、“the aggregate of individuals (within some population definition) who experienced the same event within the same time interval”ともいう(Ryder 1965 : 845)。

## 文献

- 肥後和男, 1941, 『宮座の研究』弘文堂。
- Hill, R., 1970, The three generation research design: Method for studying family and social change. In R. Hill and R. König (eds.), *Families in East and West : Socialization Process and Kinship Ties*, Mouton, 536-551.
- Mannheim, K., 1952, The problem of generations. In P. Kecskemeti (trans. and ed.), *Essays on the Sociology of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul. (Originally 1928)
- Meyer, J., 1986, The institutionalization of the life course and its effect on the self. In A. B. Sorenson, F.E.Weinert and L.R.Sherrod (eds.), *Human Development: Interdisciplinary Perspectives*, Lawrence Erlbaum, 199-216.
- 森岡清美, 1972, 地方小都市高齢者世帯の居住形態別分析(世帯), 『季刊社会保障研究』7: 4, 33-48.
- 森岡清美, 1977, ライフサイクルの概念とアプローチ, 森岡清美編『現代家族のライフサイクル』, 培風館, 1-18.
- 森岡清美, 1985, 序説—ライフコースと世代—, 森岡清美・青井和夫編『ライフコースと世代』, 垣内出版, 11-24.
- 森岡清美, 1989 a, 家族の現代的变化, 兵庫県家庭問題研究所『家族研究』1, 1-9.
- 森岡清美, 1989 b, 『新宗教運動の展開過程』, 創文社。
- Neugarten, B.L. and J. W. Moore, 1968, The changing age-status system. In B. L. Neugarten (ed.), *Middle Age and Aging*, University of Chicago Press, 5-21.
- 日本ユネスコ国内委員会編, 1966, 『第9回国際家族研究セミナー報告書』, 日本ユネスコ国内委員会。
- Riley, M.W., 1978, Aging, social change, and the power of ideas, *Daedalus*, 107, 39-52.
- Riley, M.W., 1987, On the significance of age in sociology, *American Sociological Review*, 52, 1-14.
- Riley, M.W., A. Foner and J. Waring, 1988, Sociology of age. In N. J. Smelser (ed.), *Handbook of Sociology*, Sage, 243-290.
- Ryder, N., 1965, The cohort as a concept in the study of social change, *American Sociological Review*, 30, 843-861.

Waring, J.M., 1975, Social replenishment and social change, *American Behavioral Scientist*, 19, 237-256.